

沢が尽きて優に三町は歩いた。それなのにまだ峠の道に出合わない。ミチは少し不安になっていた。山寺を発つ時に村のマタギが教えてくれた。

「二口峠をこすにや五里は歩かにやならね。この時刻からだど日暮れまでには越えられん。わし等が歩く沢道だと二里くらいかせげるが、道が険しい。それでも良かったら教える」  
 そう言つて教えてくれた道だったが、沢が尽きて一町余りで峠の道に出るはずなのに、その道に出合えないばかりか、先ほどから足元に道らしい道が見えなくなつてしまつた。  
 もう一度沢まで降りて道を確かめよう、そう考へてミチは今上つて来た斜面を下り始めた。

出羽の小国で五松に書の手ほどきを受けている間に、季節はすっかり冬の仕度を終えていた。足元には、ナラやブナの落ち葉が分厚く積もつて、歩く度に乾いた音を發てた。

時折吹く風に飛ばされた枯葉が、ミチの笠を撫でる音が心細い。

見上げると、重なり合つた枝先を透かして北国の冬らしく重く沈んだ鉛色の空が、日暮れが近いことを教えていた。

枯葉は思ひのほかよく滑る。杖を使つていても思はず尻もちをついてしまう。

何度か落葉に足を取られ、上つたと同じほどの距離を下つ

たはずなのに今度は沢に行き当たらなかつた。

ミチは耳を澄まして水の音を探した。だが、聞こえるのは梢を揺らす風の音と、舞い降りて来る枯葉の軽やかな囁きだけだつた。

右に一町歩き、左に二町戻つて沢を探した。だけどもつからなかつた。

方角を確かめようと、立ち並ぶ木々を透かして太陽を探した。山寺の方向の目の高さの空がひと際明るい。

太陽は雲にかくれて見えないが、方角だけは判つた。この明るみを背にして歩けば東に向かう。やがて山寺の東の町、仙台に続く道に出るはずだ。

気を取り直したミチは再び落葉の斜面を這うように登り始めた。

斜面を登り切つたと思われるのに、矢張り峠の道には出合わなかつた。その上、先ほど登つた場所とも違つていた。

恐らく目指す峠の道より北側に出ってしまったのだろう。確信はないが南へ進めばあるいは道に出るのかも知れない。だが、どれ位進めばよいのか見当がつかない。

暫く思案をしたミチは、このまま東に向かつて進もう、と心を決め、ブナ林の斜面を東に向かつて下り始めた。

一刻は歩いた。枯葉に足を滑らせても、樹間が広く歩き易かつた落葉樹の林が終わつて、辺りは灌木がおい繁る雑木林に変わつていた。

とつくに陽は落ちていた。空にはまだわずかに明かりが残っていたが、見透かす先にあるのは、音も無い漆黒の闇だった。

先ほどからほぼ手探りで進んでいる。張り出している枝が見えずに額をしたたかにぶっつけ、尻もちをついた。

数歩進んだところで袖が枝に掛かった。ビリッと布が裂ける音がした。

木の根に躓いて前のめりに転んだ。両ひざと肘をしたたかに打った。はずみでワラジの紐が切れてしまった。

それでも夢中で前に進んでいたミチは、五間ほど先の闇の中に不気味な光を見つけて立ちすくんだ。

二つ、いや少し離れた所に更に二つの光が、じつとミチを窺っている。一気に早鐘のように打ち始めた胸の鼓動が、頭の中で炸裂したように響いた。

猛烈な寒気が頸、肩、背中、腕を襲ってミチは動くことが出来なくなった。

離れていた光がゆっくりと音も無く動いて四つの光が並んだ。そして四つ並んだ光がすーっと一間ほど近づいてピタリと止まった。真つ暗闇の中に音も無く浮かぶ光は、今まさに、ミチに襲い掛かる間合いを計っている。

ミチが最早これまで、と臍をくくった次の瞬間、四つの光がふっと消えた。暗闇の中を何かが立ち去る気配がした。

助かった。そう思った途端、冬だというのに体中から滝の

ように汗が噴き出すのがわかった。助かったのだ。

どれくらいの間暗闇の中をさ迷っていたのか分らない。低い方へ低い方へと歩いている内に、僅かに水が流れる音が聞こえて来た。

近づく、それは谷川らしい流れの音だった。ミチは、四つの光が目の前から消えた瞬間と同じように、安堵の胸を撫で下ろした。流れに沿って下れば必ず人里に出る。

水の音を確かめながら歩き続けたが、つきの無い日とはこんなもの、冬の冷たい雨がミチを濡らし始めた。

手探りで、水音を頼りに歩き続けて温まっていた体が一気に冷えて来た。寒かった。

利之助の姿を思い浮かべると少しだけ温かくなった気がした。だけど、山中の寒気は濡れた体には堪えようのない寒さだった。

ほんの僅かだが、ようやく空に明かりが戻り始めた頃、三町先の暗闇の中に灯影を一つみつけた。

一晩中山の中を歩いて、ミチは既に一步も歩けないほど疲れていた。一杯の白湯を飲ませて欲しい。出来る事なら囲炉裏のそばで暫く眠らせてほしい。

ミチは隙間から明かりが漏れる板戸をトントンと叩いた。すると、かんぬきを外す音がして戸が開き、この家の女房らしいよく太った女が姿を現した。

女はミチの姿を上から下まで舐めるように見回し、一度あ

けた戸を物も言わずピシヤリと締めてしまった。

顔は擦り傷だらけ。着ている物はボロボロに千切れているだけでなく雨でズブズブ。片方の足は足袋裸足。

この世のものとも思えないミチの哀れな姿に、女は畏れをなしてしまったのだった。

ミチは暫くの間、戸の外に立っただま動けずにいた。その場に崩れてしまいそうだった。

いつまでもそうしている訳にはいかない。崩れそうに重くなった体を引きずるように、まだ全く何も見えない闇に向かって、頼りない一歩を踏み出した。